

Title	言葉を理解するとはどういうことか? : §12 指示と同一性(続き)
Author(s)	入江, 幸男
Citation	
Version Type	AM
URL	https://hdl.handle.net/11094/14214
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

【前回の復習】

1、指示はいかにして成立するか

(1) 指差しと一語文

指差して「何ですか」と問われて、「デンキ」と答えたでしょう。この返答を完全文の言明に直すと、これを次のように書くことができるだろう。

「<指差し>=デンキ」

これは、指差し行為という身振り言語と語の発話からなる、同一性言明として解釈できる。それゆえに、この一語の発話が真理値をもつ。

対象を指差しながら「これは何ですか」と問われて「デンキ」と答えときの完全文は、

「<指差し>+これ=デンキ」

という同一性言明である。

(2) (3) (4) 上記の議論は、デイヴィドソンによる「指示」論への批判、つまり積み木理論への批判を半分免れている。しかし、上記の説明は、クワインの指摘した指示の「不可測性」を免れてはならない。この不可測性を縮小させる一つの方法は、同一対象を複数の表現で指示することであろう。ブランダムによる単称名に関する代入の対称性の指摘は、ある表現が単称名であることの確認には、少なくとも、二つの単称名が必要であることを意味している。(私は次のように付け加えたい。ある表現が述語であることの確認にもまた、少なくとも二つ以上の異なる述語が必要であることを意味している。)

■予想される疑問

もし「<指差し>=デンキ」が同一性言明ならば、「<指差し>=これ」も同一性言明である。しかし、後者については、真や偽を語ることが出来ないのではないか？ それとも、これは常に真になる同一性言明であるのだろうか？

「これは何」と問われて「これ」と答えるようなものである。答えを完全文にすると「これはこれです」（「これ=これ」）となる。この返答は、何の情報も与えないが、真である。これと同じく「<指差し>=これ」もまた真である。

ただし「これ=これ」の場合には「これ」が何を指示しているのか解らない。指示詞「これ」の同語反復は真となるが、指示することに成功しない。指示が成功するには、異なる単称名が必要なのではないだろうか。通常言われることは、「これ」による指示がより確実に成功するにはさらに限定を加える必要がある、ということであろう。たとえば、「この川」や「あの人」のように指示詞と一般名を結合することである。それでも不十分な場合には、さらに形容詞を加えて、「この左側の川」とか「あの赤い服の人」のように限定することが出来る。あるいはさらに前置詞句や関係文を加えて限定することも出来る。つまり、より確実に成功する指示は複合単称表現によって行なわれる。

§ 1 2 指示と同一性 (続き)

2 複合単称表現による指示

(1) 複合単称表現の意味の合成性

「ボルトはどんなひとですか」という問への返答として

①「1986年生まれのジャマイカの世界最速のランナーです」

という返答があったとしよう。これは次のような同一性文に書き換えられる。

②「ボルト=1986年生まれのジャマイカの世界最速のランナー」

この右辺の複合単称表現の意味は通常は次のように説明されるだろう。

③「ボルト=< xは1986年生まれであり、かつ、xはジャマイカ人であり、かつ、xは世界最速のランナーである >であるような唯一の対象 x」

私の提案は、次のように説明することである。

④「ボルト=ある1986年生まれの人=あるジャマイカ人=世界最速のランナー」

(ここでの「=」の使用法を説明しておこう。「=」は論理定項であるが、&やvや→のように二つの命題を結合して複合命題をつくる結合子ではなくて、二つの個体記号を結合して要素命題をつくる結合子である。a = b = c という表現は通常用法ではないが、a = b & b = c の簡略表現として理解してほしい。)

複合単称表現のBedeutungは、単純な単称表現を同一性記号で結合したものが指示する対象として理解可能である。ある一つの単純な単称表現だけでは、指示を確定できない時に、他の単称表現を同一性記号で結合することによって、指示対象の確定がより確実になる。長い複合単称表現はより短い単称表現に分解され、最終的には、指示詞、固有名、一般名、量名辞、などの一語になるまで分解されるだろう。

(2) 指示の方程式

簡単な方程式の計算を思い出そう。

$$x + 4 = 12$$

xを求めるために、両辺から4を引く

$$x + 4 - 4 = 12 - 4$$

両辺を計算して、次の答えをえる。

$$x = 8$$

Fregeの意味論によると、数学での等式の両辺は、同じBedeutungであり、Sinnが異なる表現である。同じBedeutungの数を両辺に足したり、割ったりしても、等式は成り立つ。

同一性文にも同じような操作が出来るのではないか。

- ①ボルト=あるジャマイカ人
- ②ボルトの兄=あるジャマイカ人の兄
- ③ボルトが持っている世界記録=あるジャマイカ人が持っている世界記録
- ④ボルトの財布=あるジャマイカ人の財布

これは、①の両辺に「の兄」「が持っている世界記録」「の財布」を付け加えたものであるが、しかしまた②と③と④の左辺の「ボルト」に①にしたがって「あるジャマイカ人」を代入したものとすることも出来る。

⑤「私のある友達の母親＝あの赤い服の人」

このような同一性文の両辺はある同一の対象を指示している。この両辺に「のある子ども」をつけても同一性は成り立つ。

⑥「私のある友達の母親のある子供＝あの赤い服の人のある子供」

この左辺は「私のある友達」に置き換えられる。

⑦「私のある友達＝あの赤い服の人のある子供」

両辺に「のある友達」を付け加えても同一性は成り立つ

⑧「私のある友達のある友達＝あの赤い服の人の子供のある友達」

この左辺は「私」に置き換えられる（これについては、もう少し吟味の必要があるかもしれない）。

⑨「私＝あの赤い服の人の子供のある友達」

このような操作を施すことによって指示の同一性を確認して、逆に当初の同一性文の指示対象を特定することに利用できる場合があるだろう。例えば、次の同一性文が正しいかどうかを確認したいとしよう。

「オイディプスの妻＝オイディプスの母」

もしこれが正しいければ次も正しいはずである。

「オイディプスの妻の最初の夫＝オイディプスの母の最初の夫」

「オイディプスの妻の最初の夫の名前＝オイディプスの母の最初の夫の名前」

「ライオス＝ライオス」

こうして、最初の同一性文が正しいことが明らかになる。

(3) 再説：問答による指示テーゼ「指示は、問答の中で成立する」（前回のやり直し）

証明：発話は常に文の発話である。従って、語によって対象を指示する時、それは文の発話においてなされる。そして（疑問文以外の）すべての文の発話は、問いに対する答えの発話である。ゆえに、指示は、問答の中で成立する。

このテーゼが意味するのは、＜語による対象の指示は、文の発話によって行なわれる＞ということのみならず、＜語による対象の指示は、問答の中で行われる＞ということである。いいかえると、＜質問も返答もそれだけでは対象を指示できない＞ということである。

指示は、二つの表現の指示の同一性の主張において成立する。

「あなたの車はどれですか」「あれです」

もし問いを考慮しないで、この「あれです」発話だけで指示対象を確定しようとしても不可能である。

「私の車＝あれ」

という同一性言明において指示が確定する。では、問いの中の「あなたの車」は何を指示しているのだろうか。質問者は、その車がどれであるかわからない。しかし、「あなたの車」でおそらくその場に一台ある相手の車を指示している。しかし、この指示は対象まで届いていない。

■**難点**：この「問答による指示テーゼ」は、次の主張と矛盾するよう見える。

(A文) 「 $a = b$ 」が主張可能であるのは、「 a 」の指示対象と「 b 」の指示対象が同一であることが主張可能であるときその時に限る。

「 a 」と「 b 」による対象の指示が問答において可能であるとする、それぞれの指示対象を、問答によらずには同定できないことになる。「 a は何か」の答えが「 b 」であったとすると、「 a 」の指示対象は、「 $a = b$ 」によって与えられる。これは答えの循環になる。もし「 a は何か」の答えが「 c 」であるなら「 $a = c$ 」が成立し、「 b は何か」の答えも「 c 」ならば、「 $b = c$ 」が成立し、「 $a = c$ 」「 $b = c$ 」から「 $a = b$ 」が言える。それでは、われわれは次のように言えるだろうか。

(A文2) 「 $a = b$ 」が主張可能であるのは、「 $a = x$ 」と「 $b = x$ 」が主張可能であるような x が存在するとき、その時に限る。

この定義は、無限反復を引き起こすだろう。なぜなら、「 $a = x$ 」が主張可能であるような x が存在するというためには、それを見つけなければならない。もしそれが例えば c であるならば「 $a = c$ 」が主張可能であることを次に示さなければならない。そこで無限に反復することになる。

しかしこの x が指差しであればどうだろうか。「指差し = a 」と「指差し = b 」が主張可能であれば、「 $a = b$ 」が主張可能である。

■**なお残る二つの問題**

問題1：「指差し = a 」と「指差し = b 」の二つの「指差し」が同じ対象を指示していることが必要だ。そのためには、例えば、「指差し1 = a 」と「指差し2 = b 」とし、「指差し1 = 指差し2」を主張できればよいが、それはいかにして可能だろうか。

問題2：「指差し = a 」が主張可能であるための条件は何か。

(4) **指示は発語内行為と発語媒介行為によって成立する。**

質問することは発語内行為である。返答は質問の発語内行為によって引き起こされる発語媒介行為である。指示が問答の中において成立するとすれば、指示は発語内行為と発語媒介行為によって成立することになる。

デイヴィドソンは、人が何を言おうとしているのか解らなくても、それに先んじて何かを主張しようとしていることは解る、と主張した。これと同様に、われわれは人が何を指示しているのか解らなくても、何かを指示しようとしていることは解るといえるだろう。このことがわかるならば、相手の指差しなどの振る舞いや、言葉や、そのときの状況などから、相手が何を指示しているのかを、推論で突き止められるかもしれない。相手に確認するための質問をしてもよい。つまり、命題内容がわからなくても、発語内行為と発語媒介行為が理解出来るならば、そこから逆に指示対象を突き止めることができるだろう（根元的翻訳や解釈の場合）。

【**補足**：予想される疑問に答える】

(1) 次のような反論が考えられる。<「これはリンゴである」は同一性命題ではなく、主語述語命題である。これを同一性命題として解釈するのは無理がある。>

これに応えるには、主語述語命題とはなにか、考える必要がある。

主語述語命題は通常次のように理解される。<「これ」が指示する対象は、「リンゴ」という性

質を持つ>あるいは<「これ」が指示する対象は、「リンゴ」と呼ばれる対象の集合に属する>

しかし、例えば、英語で、“This is an apple”というとき、それを「これは一個のリンゴである」と訳せるだろう。それを「これ=ある一個のリンゴ」という同一性命題として理解するのは、無理のない理解である。「これはリンゴの性質を持つ」とか「これはリンゴの集合に属する」というように解釈することのほうが自然言語の理解から離れている。われわれは”This is an apple”を主語述語文として理解し、主語が個物を指示し、その個物について述語が普遍的性質を帰属させると考える。しかしこの文を改めてみると”an apple”は普遍的性質を表示しているのではなくて、個体を表示しているように見える。いわゆる主語述語文が、本当に<主語が個物を指示し、その個物について述語が普遍的性質を帰属させる>と言えるのかどうか再考の余地がある。

日本語での「リンゴ」という語の意味はなにだろうか。「このリンゴ」「あるリンゴ」は個別を指示する。性質をさすのは、「リンゴであること」や「リンゴ性」であろう。リンゴの集合全体を指示するのは「全てのリンゴ」であろう。では「リンゴ」という語は何を指示するのだろうか。それは何も指示しないのではないだろうか。「リンゴ」は、「この」や「ある」や「全て」などと結合してのみ何かを指示するのではないか。それらが付いていない用法では、それらを補って理解する必要があるのではないか。このように考える時、「これはリンゴである」は「これは一個のリンゴである」と理解できる。

もちろん「これは赤い」は「これは赤い性質を持つ」ということである。これとおなじく、「これは、リンゴである」もまた「これはリンゴの性質を持つ」と理解することも出来る。もしそうだとすると、これらの文を同一性命題「これのある性質=赤さ」「これのある性質=リンゴ性」で理解することは不自然ではないだろう。このとき「リンゴ性」が個体であり、「この性質」の方が普遍になっており、それゆえに同一性で結合するためには、このように「このある性質」にする必要がある。

(2) 朱君からの反論

問P「どうすれば (How) 地球環境はよくなりますか？」に対して

答えQ1「冷房の設定温度をあげる」

答えQ2「人口増加を抑制する」

等の回答がありえます。そしてQ1とQ2が同一であるように解釈する読みは考えられないのではないのでしょうか。

(入江の回答) 二つの答えの完全文はそれぞれ次のようになるでしょう。

PQ1「地球環境を良くするある方法=冷房の設定温度をあげること」

PQ2「地球環境を良くするある方法=人口増加を抑制すること」

PQ1の左辺とPQ2の左辺は同一ではありません。クワインが言うように、“I saw a lion. You saw a lion”というとき、二人が同じライオンを見たとは限らないからです。

(3) 同一性言明の両辺の代入可能性を考える時、次のような困難が生じる。

①「ボルト=あるジャマイカ人」

②「ボルトの父親=あるジャマイカ人」

③「ボルト＝ボルトの父親」

①に②を用いた代入をすると、③になる。これはおかしい。

(回答) そのようにはなりません。①の「あるジャマイカ人」と②の「あるジャマイカ人」は別の対象を指すからです。

§ 13 まとめ

1、以下の意味論を紹介し、検討した。

- (1) 意味の心像説
- (2) フレーゲの意味論
- (3) デイヴィドソンの意味論
- (4) ダメットの意味論
- (5) 問答意味論

2、言語哲学の射程

(1) 論理学と存在論への関わり

古典論理(二値原理)と実在論/直観主義論理と反実在論

(2) 認識論への関わり

真理や認識に関する対応説/整合説

(3) メタ倫理学への関わり

道徳的命題の意味論

道徳的判断は真理値をもつのかどうか?

もし真理値を持つなら、それは道徳的性質の認知に基づくのかどうか?

もし道徳的性質の認知に基づくなら、それは自然的な性質かどうか?

Have a nice vacation !